

奥羽越列藩同盟、そして玉蟲左太夫が遺したもの

大川真

大川 真氏略歴

一九七四年 群馬県生まれ
(父は右手県出身)
一九九三年 群馬県立沼田高等学校卒業
一九九八年 東北大学文学部卒業
二〇〇〇年 東北大学大学院文学研究科
博士課程前期修了(修士(文学))
二〇〇八年 東北大学大学院文学研究科



大川真氏

博士課程後期修了(博士(文学))
二〇一一年三月まで東北大学大学院文学研究科助教。
同年六月から吉野作造記念館に勤務(副館長)。
国際日本文化研究センター共同研究員
山形県立米沢女子短期大学非常勤講師を兼任。
専門は日本政治思想史・文化史

石川裕人さんと震災で犠牲になった方達へ捧げる

劇団OCT/PASS主宰・劇作家の石川裕人(本名、裕二)さんが二〇一二年一月一日に五九歳の若さで亡くなりました。石川さんとは震災後から一緒に仕事をすることが多くなっ

た。亡くなる一ヶ月前も私が携わっている宮城県採掘の人材育成事業(大崎の「宝」)「人」プロジェクト)で、大崎市古川にて若い世代を対象としたコミュニケーションワークショップをやった。一月一日、OCT/PASSの劇団員の方から突然の訃報を聞かされた後、私の心には思いのほか大きな空洞が出来た。私はかけがえ

のない「同志」を失ったのだ。温厚な石川さんは震災以降怒っていた。政治が被災地の生活を無視して政争に明け暮れ、中央省庁が復旧・復興を口実に予算を乱用していることにひどく怒っていた。石川さんの怒りは、最後の作品「方丈の海」にも表出していた。

近現代以降、日本が中央集権化を加速的に進める中で「富める地」と「貧しい地」をつくり出した。東北に生まれた多くの人たちは何かしらのコンプレックスを持って生きている。経済的には確かに顕然たる格差がある。しかし文化的に格差は本当にあるのだろうか。その場合の格差はいったい何に基づいているのか。

東北人は我慢強くおとなしいとよく言われ、震災後もその言動が称賛された

が、復興の遅滞にはみな心底怒っている。怒っても甲斐がなく疲れるだけなので、そうしないだけだ。だから石川さんは代わりに怒っていた。震災で犠牲になった方々の分も含めて。今は石川さんも震災で犠牲となった方々と一緒に演劇をしている。だから私が代わりに怒ろう。石川さんや亡くなられた多くの方々に敬意を示し、怒りの力を攻撃や批判することにふり向けるのではなく、私たちの血肉から内なる東北の文化を呼びさまし、「産み」の力へと変えていこう。今回紹介するのは、幕末に活躍した仙台藩士玉蟲左太夫である。一九九九年に東北放送で「世界を見たサムライ・ルポライター」悲劇の仙台藩士・玉蟲左太夫」という番組が製作されたが、石川さんも出演しこの番組のために書いた戯曲「超サムライ 玉蟲左太夫」も上演され話題となった。私は思想家家なので、玉蟲左太夫の政治思想に光を当てていくことにしよう。

奥羽越列藩同盟の組織は、盟主を輪王寺宮、総督を仙台藩主伊達慶邦、米沢藩主上杉齊憲、参謀を小笠原長行、板倉勝静とするが、注目すべきは政策決定機関として白石に奥羽越列藩を置き、最高機関を奥羽越列藩会議にしたことである。同盟成立直前の、一八六八(慶応四)年閏四月二十九日に仙台にて調印された奥羽越列藩同盟盟約書を見てみると、第六条に

「仁政」が実現された西洋

シリーズ・東北の偉人たち

第二回

東北には多くの偉人がいた。東北人らしく、小手先ではなく、真正面から時代の状況に真摯に向き合い、大胆かつ自由で、グローバルな成果を残した偉人たちがたくさん存在した。時代を先取りし、日本をリード

してきた偉人たちである。いま、この大震災とそこから復興実現という難局にあたり、支援の手は同時代人からのものにとどまらない。多くの先達の危機に立ち向かう勇氣と意気込み、そして知恵に学ぶべきものは多い。こうした観点から、シ

リーズで、多くの東北の偉人を取り上げていく。今回取り上げるのは奥羽越列藩同盟で活躍した玉蟲左太夫である。いまや知る人も少なくなったが、その思想の先進性には注目すべきで、明治時代まで生き残り、活躍して欲しかったと思う人物である。

まず奥羽越列藩同盟から説明することにしよう。東北地方は、日本の近代化の過程において起こった戊辰戦争での最大の激戦地でもある。一八六八(慶応四)年一月に起きた京都鳥羽・伏見の戦いを皮切りにして、幕府軍と、薩摩・長州などの西南諸藩を中心とした新政府軍とが各地で激しい戦闘を展開し、翌一八六九(明治二)年五月の函館五稜郭の戦いにて幕府軍は降伏し、戊辰戦争は終結する。奥羽越列藩同盟とはこの戊辰戦争中、一八六八(慶応四)年五月三日に東北の二六藩、後に新発田藩ら北越の六藩も加わり結成された新政府軍対抗への軍事同盟である。注目の軍事同盟である。注目の軍事同盟は、奥羽越列藩同盟は、すでに恭順の意を示した会津・庄内両藩の「朝敵」赦免を嘆願する目的で結成されたものであり、また親藩である会津藩、譜代である庄内藩を、外様である仙台、米沢両藩を中心とした奥羽諸藩が助けるといふ、藩の立場の別を越え東北の多くの藩によって結成された、いわば「義」と「情」の地域連合であったということである。

奥羽越列藩同盟の組織は、盟主を輪王寺宮、総督を仙台藩主伊達慶邦、米沢藩主上杉齊憲、参謀を小笠原長行、板倉勝静とするが、注目すべきは政策決定機関として白石に奥羽越列藩を置き、最高機関を奥羽越列藩会議にしたことである。同盟成立直前の、一八六八(慶応四)年閏四月二十九日に仙台にて調印された奥羽越列藩同盟盟約書を見てみると、第六条に

「仁政」が実現された西洋

玉蟲左太夫の生涯

玉蟲左太夫は一八二八

「仁政」が実現された西洋